

# 『山谷題跋』卷四に於ける二王の存在に関する考察（上）

塚 本 宏

## はじめに

『山谷題跋』は、北宋の黄庭堅（山谷）（一〇四五～一一〇五）が書いた題跋を収録したものである。

今日、見ることのできる『山谷題跋』は三種ある。明の毛晋の『津逮秘書』本（略して『毛本』）、明の黄嘉惠のもの（略して『黄本』）と、清の温一貞のもの（略して『温本』）である。それぞれの題跋の数は各本によって次表のような違いがある。

本	卷一 49篇	卷二 44篇	卷三 33篇	卷四 34篇	卷五 42篇	卷六 34篇
毛	卷七 47篇	卷八 68篇	卷九 61篇	(計 九卷 412篇)		
本	卷一 52篇	※57篇		卷二 61篇	卷三 67篇	卷四 81篇
黃	(計 四卷 261篇)					
本	卷上 83篇	卷中 111篇	卷下 106篇	(計 三卷 300篇)		
溫						

※印は『書画書録解題』による。

『毛本』九巻の内容は、巻一、二は詩文、巻三は画、巻四・五は書、巻六・七・八・九は詩文と書画に関するものであるが、本稿はその中の巻四を中心に扱い、特に二王即ち王羲之（三〇七頃～三六五頃）と王獻之（三四四～三八六）の父子に関する篇について考察の対象とした。各篇は次の通りである。

- 1 題太宗皇帝御書（太宗皇帝の御書に題す）
- (2) 跋蘭亭（蘭亭に跋す）
- (3) 又（又）
- (4) 書右軍帖後（右軍の帖の後に書す）
- (5) 書右軍文賦後（右軍の文賦の後に書す）
- (6) 題瘞鶴銘後（瘞鶴銘の後に題す）
- (7) 題樂毅論後（樂毅論の後に題す）

- (8) 題東方朔畫贊後(東方朔畫贊の後に題す)
- (9) 題洛神賦後(洛神賦の後に題す)
- (10) 跋法帖(法帖に跋す)
- (11) 題絳本法帖(絳本法帖に題す)
- (12) 書遺教經後(遺教經の後に書す)
- (13) 跋佛頂呪(佛頂呪に跋す)
- (14) 跋續法帖(續法帖に跋す)
- (15) 題榮咨道家廟堂碑(榮咨道家の廟堂碑に題す)
- (16) 題張福夷家廟堂碑(張福夷家の廟堂碑に題す)
- (17) 題蔡致君家廟堂碑(蔡致君家の廟堂碑に題す)
- (18) 題虞永興道場碑(虞永興の道場碑に題す)
- (19) 題徐浩碑(徐浩の碑に題す)
- (20) 題楊凝式詩碑(楊凝式の詩碑に題す)
- (21) 題楊凝式書(楊凝式の書に題す)
- (22) 跋張長史千字文(張長史の千字文に跋す)
- (23) 書張長史乾元帖後(張長史の乾元帖の後に書す)
- (24) 跋張長史草書(張長史の草書に跋す)
- (25) 題顏魯公帖(顏魯公帖に題す)
- (26) 題顏魯公麻姑仙壇記(顏魯公の麻姑仙壇記に題す)
- (27) 跋顏魯公東西二林題名(顏魯公の東西二林の題名に跋す)
- (28) 書徐浩題經後(徐浩の題經の後に書す)

- (29) 跋翟公異所藏石刻(翟公異所藏の石刻に跋す)
- (30) 跋王立之諸家帖(王立之の諸家帖に跋す)
- (31) 跋李後主書(李後主の書に跋す)
- (32) 跋李伯時所藏篆戟文(李伯時所藏の篆戟文に跋す)
- (33) 跋洪駒父諸家書(洪駒父の諸家の書に跋す)
- (34) 跋武德帖(武德帖に跋す)

( )の篇は二王と関係のある篇

# 一

『山谷題跋』巻四、三十四篇の内、二王と何らかの関係があるものは十九篇である。まずはじめに、「跋蘭亭」であるが、これは二篇にまたがり続いている。山谷は羲之の蘭亭序について、まず羲之自身の「號稱最得意書」と称している。「最得意書」という山谷のとらえ方であるが、何を根拠に山谷はこのように論じているのであろうか。今後の一つの課題である。山谷自身も蘭亭序から学ぶことは種々あったのであろうから、その氣持をも含んでの言であらう。また、蘭亭序そのものは宋、斉時代以来、秘府に所藏されていて士大夫の眼にはほとんどつかず、知られていなかったのである。後世になって随の智永禪師がその妙蹟を確認し、さらに後輩の虞世南や褚遂良に蘭亭序を称道し

たのである。そしてその後唐の太宗はあらゆる方面にこの真蹟を求めようとして手を尽し、結局は権力にものを言わせて手に入れたのである。蘭亭序が智永の弟子の弁才に伝えられ、秘蔵していたのを見抜かれてやがて太宗の手に落ちる話は、何延之の『蘭亭記』に真実はともかくとして有名なエピソードがある。

つづいて「又」として蘭亭序について触れ、さらに「王右軍平生得意書也」と冒頭にある。前述では「最得意書」であつたが、「最」の代りに「平生」が入っている。これは山谷のどのような見方なのであろうか。単にこれは「ふだんから得意とした書」ということであらう。即ち蘭亭序のような草稿は行書体であるということから羲之にとつては平生の書と山谷の眼には写つたのである。さらにその書風を觀察して、「略無一字一筆不可人意。摹寫或失之肥瘦、亦自成妍。」とある。即ち、ほぼ一字一筆も人意にかなわぬことはない。模写したものが時にはあやまって肥えすぎたり痩せすぎたりするところもあるが、おのずから妍美な書となつていと述べている。要するに書を学ぶものが各々それらを心得て、蘭亭序の妙なる点を心で理解しなければならぬというのである。蘭亭序は真行書の宗たるべきものであるが、必ずしも用筆法中心に考える技巧を主としたものではなく、精神性からくる自然美の一つとしてとらえるべきで

ある。それは周公や孔子に例えれば聖人でも小さな欠点はある。しかし、欠点はあつても聖人の全体の本筋である聡明睿智は失ふことなく、聖人の本質を保持しているのである。正に蘭亭序とは、ささいな技法にこだわるのではなく、全体の流れ、書風、書作の精神をとらえることが重要であると山谷は説いているのである。しかし、学び方のよくない者たちは、聖人のささいな欠点ばかりを学んで、大局をしっかりと学ばないので問題が起るのである。蘭亭序を学ぶ者もささいな書の技法を学んで蘭亭序の良さである全体の流麗美とか、全体の書の雰囲気とか、羲之が書いたときの気持などの書の本筋を学びとうとしない所に問題があるのである。とかく目先きの小さな技法の変化ばかりを学びとうとして、その本質的な大きな流れをとらえようとしないうちに問題があるのである。

昔、魯の国で門を閉ざして女を室に入れなかった男が「私は柳下惠のような立派な人物ではないから、女が室に入れてくれと言つても入れなかったが、実は柳下惠が女を室に入れた精神に学ぶものである。」と言つたが、そういう心がけで書を学ぶべきであると山谷はさらに付け加えてこの「跋蘭亭」を結んでいる。柳下惠は春秋時代の魯の大夫で、賢人で物事にこだわらず、孟子に「聖の和」と評された人物である。その立派な柳下惠が女を室に入れても誰にも疑われず信頼があつたが、魯のある男

は女に頼まれても室に入れなかったというのである。それは自分が柳下惠のような立派な人物なら誰も疑わぬが、自分はそうではないので女を入れることはできぬと言ったのである。故えに蘭亭序を学ぶのも、俗人がなんでもかんでも目先きのことをだけを学んでもだめで、立派な人物が学べばそれなりのものを学びとることができるということを山谷は力説しているのである。従って蘭亭序から学ぶものは、全体に流れる書の美しさ、即ち流麗美であり、その底に流れる羲之の精神性であり、表面にあられてはいるささいな用筆の技法の変化を学ぶことが主体ではないということ。また、書を学ぶときもそのような心がけでぞむべきであると主張している。また、本題跋での聖人と柳下惠の例は全体的に流れる精神性を重んじる所に書の本質があることを山谷は述べているのである。

なお、ここで留意すべきこととして、山谷はどのような蘭亭序を見てこの跋文を書いたのであろうかということが、また一つの問題としてある。模本であることは当然であるが、どの系統の模本かということである。即ちこの題跋がどの模本に記されているかとも当然関係する。本題跋の内容が技法にこだわることなくというようなことについて触れているので、中でも褚遂良臨本系統の技巧が表面に多く出ているものなのか、それとも反対に定武本系統の模本かということになるが、具体的には

ほとんど不明である。

また、蘭亭序については「山谷題跋」巻七の「評書」に

今時、蘭亭を学ぶ者は、其の筆意を師とせずして、便ち行勢を作る。正に西子（西施）の捧心（病に悩む心）を美として、自ら其の醜に寤めざるなり。余、嘗って漢時の石刻の篆隸の頗る楷法を得て後に生ずるを觀たり。若し余の説を以て蘭亭を学ばば當にこれを得んや。元祐六年（一〇九一）十月丙子、蕪湖縣（安徽省）に於て風に阻まれ、後に吉祥寺に行きて魯直（山谷）題す。

とある。即ち、近ごろ蘭亭序を学ぶ人はその筆意を師として大切に学ぼうとしないで、ただ行書の形を学ぼうとしている。これは丁度かの美人と言われた西施の病に悩む心を美しいと思ひ込み、その醜いことに気がつかないのと同じである。目先きの形の美しさに心引かれて形を学ぶのではなく、それを作り出す筆意を師とすべきである。それは漢代の石刻の篆隸がよく書法になつてゐるのを觀たことがあるが、もし私（山谷）の説を以て蘭亭序を学んだならば、きつとこの筆意を師とすることの重大さを体得するであらうと述べている。

さらにまた「山谷題跋」巻八の「題唐本蘭亭」には、

紹聖元年（一〇九四）六月乙未、上藍院南軒にて、程正輔（程之才）と共に、唐本蘭亭を觀る。大いに姿媚たるといえど

も定州石刻（定武本蘭亭）の清勁に及ばず。然れどもまた自ら勝處あり。洛神賦、余は嘗て王令の遺墨に非ずと疑う。豈に古本既に零落し、後人のこれを附託するか。周越、収斂少の筆勢もまた此に及ぶ可きなり。

とある。山谷がこの程正輔と一緒に見たという蘭亭序は何であったのか。定武本蘭亭の清勁さに及ばない蘭亭序とはきつとより変化に富んだ技巧的なものであったのであろうか。

また、『山谷題跋』卷七に「書王右軍蘭亭草後」と題して

王右軍の蘭亭の草、号して最も得意の書と為す。宋齊の間、秘府に蔵するを以て士大夫の間、称道する者を聞かず。豈に未だ大盜兵火を経ざりし時、蓋し墨跡の蘭亭の右に在る者有りしならん。梁州の間、焚蕩に及び、千に一を存せず。永師晚出し、此の書は諸儒皆推して真行書の祖と為す。ゆえに唐太宗は必ずこれを得んと欲す。其の後公私相い盗み、発塚に至る。今、遂に之を失う。書家、定武本を得るも蓋し髣髴として古人の筆意あるのみ。褚庭誨の臨む所は極めて肥にして、洛陽の張景元地をきり缺石を得極めて瘦なり。定武本は則ち肥なること肉をあまさず、瘦なること骨を露わさず。猶お其の風流を想うべし。三石刻は皆佳處あり。必ずしも宝のみにあらずして彼にあらざるなり。

とあるが、前述の卷四の「跋蘭亭」とよく似ている。

次に「書右軍帖後」であるが、この「右軍帖」とは一体何か。羲之の尺牘六三八通の中にもこのような名前の書状は見当らない。はたして誰が書いたものか、いつの時代のものか未知である。跋文の全体は

曹蜎・李志の輩、書字は政に右軍父子と衡を争う。然れども伝うるに足らざるなり。所謂、敗壁片紙も、皆な数百歳に伝うるは、特に其の人に存するのみ。

とある。曹蜎は曹茂之、幼時の字が蜎、字は永世。彭城（江蘇省）の人。東晋の尚書郎。李志は、字は温祖。鍾武（河南省）の人。李重の子。東晋の員外常侍、南康相。この兩人については『世説新語』（以下『世説』と略す）品藻第九<sup>68</sup>に

庾道季云う、「廉頗<sup>(1)</sup>、藺相如<sup>(2)</sup>は千載上の死人と雖も、慄慄として恒に生氣有り。曹蜎、李志は見在すと雖も、厭厭として九泉下の人の如し。人皆此の如くんば、便ち結繩<sup>(3)</sup>して治む可し。但だ恐る、狐狸猪獠のくらい尽くさんことを」と。

とこの兩人の人格について記されている。曹蜎と李志は「厭厭」として九泉下の人の如し。」とある。この兩人の書く文字は二王と優劣を争うほど巧みであるが、後世に伝えるには不十分である。二王の書がたとえ敗壁片紙でも皆数百年の後までも伝えられるということは、二王の人格によるものである。前述の『世説』内で言っている慄々とした生氣が書を通して今なお強力

に感じられるからこそである。曹蜎と李志の書は恐らく技術面では二王と優劣を争うほどではあるが、人間としての精神力の強さから見ると、二王とは比較にならないと山谷はここでも書に於ける精神性を強調している。

「書右軍文賦後」については

余、黔南に在りしとき、未だ甚だしくは書字の綿弱なるを覚えず。戎州に移るに及び、旧書を見るに多く憎む可し。大概十字の中、三四差や可なるもの有るのみ。今方に古人の沈著痛快の語を悟る。但だ知音為り難きのみ。李翹叟、褚遂良の臨せる右軍の書文賦を出だす。豪勁清潤、真に天下の奇書なり。

とある。山谷は黔南(黔州)には、一〇九四年から一〇九七年まで、また戎州には一〇九八年から一一〇〇年まで居た。山谷五十歳から五十六歳までのことであるが、黔南に居る頃に書いた字は弱いとはさほど感じなかったが、戎州に移ってから昔の書を見ると気に入らないものばかりである。十字の中、三字か四字がややましなでき上がりである。今では古人の「沈著痛快」の語の意味を悟ったが、真に心を知る友とはなりがたいとある。山谷五十歳を過ぎて自分の書について具体的に自分自身で気がついたことがあったようである。薄弱で線質に落付きがないと感じたのであろう。その点を意識すると、三、四十パーセント

がまずまずのでき具合となり、やはり昔から言われている「沈著痛快」の語の言わんとしていることの重要さを悟ったというこの書に対する見解態度は、一貫していてよく理解できる。しかし、山谷はまだその境地には至っていないと自分をさらに厳しい眼で見ているのである。山谷はさらに書の深遠なものに挑戦することになるのである。そして、荊州の人で司法官の李翹叟が褚遂良の臨書した羲之の文賦を見せてくれたが、この書は正に豪勁清潤できつと山谷にはない境地の書だったのであろう。そして最後に「真天下之奇書也。」と感想を加えている。即ち「沈著痛快」でしかも「豪勁清潤」こそが山谷の書の理想であり、それが羲之の書の中に見出し得たということである。

「題瘞鶴銘後」は「右軍、嘗て戯れに竜爪書を為す。今復た見ず。余、瘞鶴銘を観るに、勢飛動するが若し。豈に其の遺法なる邪。欧陽公、魯公の書せる宋文貞碑を以て、瘞鶴銘の法を得とす。詳らかに其の用筆の意を観るに、審らかに公の説の如し。」とある。

竜爪書とは羲之が酒に酔って数字を書いたとき、その点画が竜の爪によく似ていたのでこのように呼んだのであるが、「墨池編」には、「竜爪書者、晋王右軍羲之は天台に遊ぶ。還た会稽に至り、風月清照するに値し、夕に洞亭に止る。吟詠の末、柱に題して一飛字を作る。竜爪の形あらん。遂に竜爪書と称す。そ

の勢は竜蹙虎振の若く、劍を抜き弩を張る。」とある。羲之が書いた竜爪書は今日では見ることはできない。しかし、山谷が見た瘞鶴銘はその竜爪書によく似ているというのである。しかも筆勢が飛動するような所は竜爪書の遺法なのであろうかというのである。そして、欧陽修は顔真卿が書いた宋璟碑が瘞鶴銘の法を得ていると言われたが、詳らかにその用筆の気持を観察してみると、たしかに欧陽修の言われた通りである。羲之が酔って書いた竜爪書が瘞鶴銘に似て、その瘞鶴銘の用筆法を真卿の宋璟碑が得ているという一つの黄山谷の見方ということであらう。竜爪書、瘞鶴銘、宋璟碑の三者に流れるものに山谷は一つの何かに納得したのであろうが、具体的に一体何なのであろうか。竜の爪に似た線とは鋭くて人を切るような雰囲気（きぶん）の線だと思いが、一体どのような点が瘞鶴銘と似ているのであろうか。しかし、これは表面の字形だけを見ての判断は禁物である。用筆、線質、そして全体の雰囲気、流れなどからくるものであることを忘れてはならない。

## 二

「題樂毅論後」には、「余、嘗て戯れに人の為に書を評して云く、『小字は癡凍蠅（ちとうりゅう）を作すこと莫（な）れ。樂毅論は遺教経（いぎょうきょう）に勝る。大

字は瘞鶴銘に過ぐるもの無し。人に随いて計を作さば、終に人に後る。自ら一家を成して、始めて真に逼る。然れども適（あた）た小楷（せうがい）を作すも、亦た規矩（きこ）を擺脫（たいはく）すること能（あた）わず」と。客曰く、『子、何ぞ子の凍蠅（りゅう）を捨てて、人を凍蠅（りゅう）と謂（い）うや』と。予、以て之に応（こた）うる無し。固より知る、書は某（あ）鞠（きく）、技（ぎ）を等しくすと雖（な）も、不伝（ふでん）の妙（みょう）を得るに非（あら）ずんば、未だ工（こう）みなること易（やす）からざるを。」とある。

樂毅論は三国時代の魏の夏侯玄（はうごげん）の文章を羲之が細楷（さいがい）で書いたものであり、遺教経（いぎょうきょう）は羲之が書いたものという人もあるが、本来（もと）は違（ちが）うようである。「欧陽脩（りゅうしゅう）は唐（たう）の写経生（しやきやうせい）の書（しよ）となし、この書の碑陰（ひいん）によれば比丘道秀（ひしうだうしゆ）の書で、建中三年（けんちゅうさん）のものである」と記されている。その樂毅論（りきぎろん）は遺教経（いぎょうきょう）よりも秀（う）れている。大字（だいじ）では、瘞鶴銘（しやくかりょう）よりすぐれているものはないと山谷（さんやう）の評（ひ）である。そして、これにつづいて「隨人作計（ずいじんさくけい）、終後人（しゆうごうじん）。自成一家（じぜいいつか）、始逼真（しじつしん）。」と人生論（にんしよろん）めいた言（こと）が突然（とつぜん）飛び出（で）してくる。これは山谷（さんやう）としては「自成一家（じぜいいつか）」ということが言（こと）いたたいのであろうが、自分（みづか）でも思（おも）うようにそれができない悩み（なやみ）がある。一例（いれい）としては「小楷（せうがい）を書いても手本（てほん）から抜け出（で）せない。」と、その後（のち）につづいている。二王（にわう）の域（いき）を出（で）ないこと、即ち一家（いつか）を成（な）すことができないことを切実（きせつ）なこととして反省（はんしやう）している。そこへ客人（きやくじん）が火（ひ）に油（あぶら）をそそぐような質問（しつもん）を山谷（さんやう）の頭（かぶ）からあびせかけた。即ち「子何捨子之凍蠅（しにんぜしちとうりゅう）、而（しか）

謂人凍蠅。」とあるが、これには山谷は応えられない。これは自分でも認めていることだからである。そして最後に本題跋では、「書は碁や皮毬と同様に技法を必要とするが、不伝の妙を体得しなければ巧みなりがたい。」と力説している。書の細かい技法は必要ではあるが、それよりもっと大切なのは不伝の妙を自分の努力で得なければならぬというのである。自分の小楷が凍蠅であることはまず反省をして、なおかつ山谷自身が言いたいことは、目先には見えない不伝の妙を得るという重要な問題の提案が自分自身に対してなされたのである。誰にでも目に見えることはやさしいが、目に見えない奥に秘むことを体得することとは難しい。書に本当に巧みなこととは、手先の技術だけではなく、このような目には見えない不伝の妙を自分の力で獲得することだと山谷は言いたいのである。

「題東方朔畫贊」には、「予、嘗て東方画贊の墨跡を觀たり。疑うらくは是れ吳通微兄弟の書ならんと。然れども敢えて質さず。遣筆結字、極めて通微の書に似たり。黃庭外景は仏頂石刻の記の如し。ただ是れ經生の書なるのみ。引いてともに列を同じくす可からず。」とある。この東方朔画贊には、羲之が書いたものと顔真卿が書いたものと両方がある。羲之のは細楷であるが、吳通微兄弟のものは不明である。東方朔画贊は漢の武帝に仕えた人物の画像の贊で、文は西晋の夏侯湛によるもので

ある。また、黃庭外景は羲之の黃庭經のことである。これはどこにでもある仏頂石刻記のようなものであるからたいした書ではない。寫經生の書にすぎないので、なにも東方朔画贊と同列に論じなくてもよいというのが山谷の見識である。この両者を比較して見直してみると確かに黃庭經のほうが画一的で、より理知的であるのに対して、東方朔のほうは情感が伝わってきてどこか暖かみのあるものである。山谷が同列にして論じてはならないという明確な見解もわかるような気がする。

次の、「題洛神賦後」には、「予、嘗て疑う、『洛神賦は子敬の書に非ず』と。然れども字学筆力、之を去ること甚だ遠きを以て、敢えて此の論を立てず。今、之を觀るに及んで、宋宣献公・周膳部、少しく筆力を加うれば、亦た此に及ぶ可し。」とある。洛神賦は王獻之の書であるが、この賦は魏の曹植が作ったものである。前後がなくなってしまう、中間の十三行のみが残っているのが洛神十三行とも呼ばれる。しかし、山谷はこれに疑問をもって、「洛神賦は子敬の書に非ず」と発している。今までは気にはなっていたのであろうが、山谷は子敬と文字に対する学習の面からも筆力の面からも遠く離れていたもので、敢えて意見を言わなかった。今こうやってよく見ると宋綬や周越でも、少し筆力を加えればこの程度のもものは書けるのではないだろうかとの山谷の見解である。これも前述の樂毅論のときのように自



分のことはさておいて、よくも思いきって言えるものである。

しかし、ここで山谷は「筆力」に目をつけていることはさすがである。即ち、洛神賦十三行に対してももう少し筆力の強さが欲しいということになる。山谷自身はできないかもしれないが、自分の師である周越には少なくともこのくらいは書けるという言い方は実に歯切れがよい。

次の「跋法帖」は、二十二項目の内容から成り立っている。

「法帖」とは『淳化閣帖』のことなので、関係した跋は多岐にわたっているが、二王に関した内容のものは十一項目である。「跋法帖」の第一番目には、「孔明の劉玄德に對する語を書せる、章草の法甚だ妙なり。王中令の書と先後を知らず。要は皆な妙墨為り。蓋し張芝・索靖両家を融會し、骨肉豐殺、略ば相い宜しきのみ。」とある。

孔明は諸葛亮、蜀の劉備の補佐役として高名である。劉玄德は劉備、王中令は王獻之のことである。獻之は中書令となつたので王中令とか王大令と称された。諸葛孔明が劉備に應える語を書いた章草の書き方が絶妙であつた。獻之の書とどちらが秀れているのだろうか、どちらも妙墨であつた。この孔明の書は張芝と索靖の二人の法を融合し、骨肉あいよろしきを得たように見えると山谷は述べている。この「骨肉豐殺」とはさすがに詩人としての才能を発揮し、豊かな表現の一端を表出している

妙である。

同じく「跋法帖」の第五番目に、「余、凝之の字法を觀るに、最も密なり。多見せざるを恨む。」とある。凝之は羲之の二男で、字は叔平。王玄之の弟であり、草書、隸書に工みであるといわれた。その書法は最も「茂密」であると山谷は見ているが、数多く見られないのが残念である。しかし、羲之の子供なるが故にその才を山谷は見抜いているのであろう。

「跋法帖」二十二項ある内の第十一番目に、「王侍中は鍾繇を學びて絶だ近し。真行皆な妙なり。此の書の如きは乃ち臨學す可し。謝太傳の墨跡、附馬都尉の李公炤之をたち、姿媚の態度をなさずと聞く。恨むらくは見ざりしのみ。若し但だ此の卷中の帖の如くんば、右軍父子の間を去ること、数人をおくべし。」とある。王侍中は王廙、羲之の叔父にあたる。この王廙は鍾繇の書を學んで非常に近付いていて楷行とも絶妙である。この書は臨書して學ぶべきものと言えるくらい素晴らしいものであると述べ、後半では謝安について触れ、謝安の墨跡は李瑋が所有しており、姿媚ではないと噂されているが山谷は実際には見えない。しかし、この法帖の中に収められているような作品ならば、二王と謝安との間にはまだ数人の名手が居るのであると、羲之の親友である謝安との比較を試みてはいるが、この場合は山谷は謝安の書を実際に見ての感想ではないので少々問題発言

である。しかし、謝安の墨跡を所有している李璋は、水墨竹石を善しく、章草や飛白を善くしたのであるから鑑賞眼は確かなのであろう。恐らく秀れた作品を所持しているのではないだろうか。

次に、第十三番目には短く、「郗方回の書、初め王氏父子に減ぜずと。誠に浪語ならず。」とある。郗方回とは郗愔のこと、東晋の司空であり太尉であつた郗鑒の子で、羲之の妻郗璿の兄にあたる。郗愔は東晋の臨海太守であつたが天師道を信仰して政務を怠り隠棲した。その後再び仕えて平北將軍、会稽内史そして司空となつた。この郗方回の書は当初は二王の書に劣らなかつたというが、これは決してでたらめではなく、根拠のあることだということを山谷は言いたいのである。例えば王僧虔は『論書』の中で

郗愔章草、<sup>て</sup>垂於右軍

と誉め称え、さらに『宣和書譜』卷一四に

王僧虔以謂、愔書垂王羲之。豈妄論也。

と『論書』が引用されている。これは方回の書、特に章草は二王に劣ることもなく、また「垂於右軍」とまで評されたことは宋代において人気があり評判が高かつたことになる。そのことを聞き知つた山谷は「初不減王氏父子」と表現している。しかし、「不減」とは劣らない、即ち考えようによつては同等にも思

える。王僧虔の場合には「垂於右軍」であるから、あくまでも羲之に次ぐ存在であるということである。

つづいて第十四番目に、「謝太傳稱所の『道民<sup>8</sup>安』は、蓋し五斗米道を事とするものなるか。右軍、獻之の女王潤の為に罪を請うも、亦た民と稱するなり。」とある。五斗米道とは二王の時代、広く流行した道教であり、後漢の張陵の立てた道教で、張陵に従つて道を受ける者は米五斗を出したことからこの名称がある。「道民安」は道教即ち五斗米道を信奉している民のこと、王家は代々これを信奉し、篤く信じていた。しかし、謝安のことはあまり聞いたことはなかつたが、謝安の尺牘「六月廿日帖」には、「六月廿日具記、道民安惶恐言。……」などであるのは五斗米道につかえる者の意味であらうかという山谷の疑問である。そして、二王は五斗米道の信奉者としては有名であり、羲之が獻之の娘の玉潤の持病のことで道士に手紙を送り、心から自らを「民」と称しているのであるが、謝安が「道民」と称したのも同じようにこのような理由によるものであらうと山谷は理解できたのである。

第十六番目の中ほどに、「足下、時事少なく、数来す可し。主人相い尋ぬ」以下十一行。語鄙しく、字画も亦た韵あらず。右軍が簡札に非ざること灼然たり。知らず那ぞ阿堵の中に濫吹するを得ん。此の巻の中、「伯趙嗚いて載ち陰、爽鳩習いて武を

揚ぐ』と、『たちまち行李に因りて、願わくは故旧を存せん』とは皆な鄙語なり。右軍が意に非ず。書札も亦た相い去ること遠甚たり。』とある。手紙の書き方や言葉使いが俗で、字韻がない、ということは羲之の手紙でないことは明白である。どうしてもこの法帖の中にまぎれ込んで高い評価を得ているのであろうか。また、行成帖の「伯趙鳴いて載ち陰、爽鳩習いて武を揚ぐ」という句と、承足下還來帖の「たちまち行李に因りて、願わくは故旧を存せん」という句は、両方とも俗な語で羲之の意を伝えていない。書も右軍には遠く及ばないものであるとある。これは俗語と書の品格についての山谷の指摘である。言葉よければ書もよし、書がよければ言葉もよしという所を具体的にに取り上げているのである。法帖を編集する上で羲之のものとしたが、これはきつと編集上の誤りであろう。

つづいて第十七番目の「跋法帖」には、「癰の即潰せざる薬法。書家右軍に非ざるかと疑う。余、其の自ら一体を成すを愛す。其の間恨む可き有るも、或いは是れ伝摹、真を失うのみ。」とある。腫物がすぐにくずれない薬法を述べた一帖を書家は羲之の書ではなからうと疑っている。しかし、山谷はその自ら一体を成している所を愛し、所々に不十分な点があるのは、伝模するうちに真を失っただけのことであろうと、今度は前述とは逆に羲之の書らしからぬ書を弁護して見守っている。

さらに、第十八番目の「跋法帖」には、「此の字、東方朔画賛と相い似たり。而れども子瞻謂う、『画賛も亦た右軍が書に非ず』と。人間の愛憎、常に自ら合せざるは、退之・柳子厚の鶻冠子を論ずるが如き、知る可きなり。」とあるが、これは『東坡題跋』卷四の「題逸少書」の「又」にある

蘭亭樂毅東方先生三帖皆妙絶。雖摹寫屢傳、猶有昔人用筆意思。比之遺教經、則有間矣。

と関連があり、東坡が「画賛も而た右軍が書に非ず」と言っているのは、あくまでも羲之の書が摹本であるから、よく似ていたとしても羲之の書ではないと述べているのである。人間の愛憎がいつも合わないものであることは、丁度、韓愈と柳宗元が鶻冠子<sup>(9)</sup>のことで論じあつてお互いに相い入れないのでよく似ていることを知るべきであると山谷は論じている。鶻冠子<sup>(9)</sup>のことで論じあうということの内容は、『四庫提要』の「子、雜家類」に

韓愈は鶻冠子十六篇、其の詞、黄老刑名を雜ふといひ、柳宗元は盡く淺陋の言なりと之を卑む。

とあり、韓愈は鶻冠子を推称の立場をとり、柳宗元はこれを難ずる立場をとって対立したのである。

第十九番目の「跋法帖」に、「昨遂不奉恨深帖。秦漢の篆筆有り。中令、自ら言う、『故より応に同じからざるべし』と。真に

虚ならざるのみ。中令の書中、「相い労苦す」の語有り。極めて佳なり。之を読んでついに解す可からざる者は、当に是れ牋素敗れ、逸字多かるべきのみ。其の読む可き者を観るに、其の爾を知るのみ。米芾元章、専ら中令の書を治む。皆な意を以て附会し、解説して理を成す。故に杜元凱の春秋癖に似たる耶」とあるが、「故應不同<sup>(10)</sup>」と獻之が自ら言っているが、自信の程が前面に押し出されている。羲之と同じでないのは当然である。そして、「眞不虚爾」と山谷も力を入れているが全く同感である。しかも山谷は「相労苦」の語を大いに誉めている。米芾はもっぱら獻之の書から学んだということである。自分の調子をプラスして獻之の書を解きほぐし道すじを立ててわかりやすくして自分のものになっている。米芾はさすがである、と同時に山谷は獻之の実力も大分かっているようである。そして、さらにつづけて二王は楷書、行書はほぼ同じようなものであるとしている。何故かというと、山谷は以前に書を評して、「字中に筆が生きているのは、禪家において句中に眼目があるようなものだ」と言っている。この「眼目」を具有している者ならば、二王の楷、行がほぼ同じ程度のものに見られることが理解できようというのである。何か謎をかけられたような感じはある。「禪家において句中に眼目があるようなもの」とは、形式的な決り文句のようにも感じられるが、山谷は禪にも造詣が深かったのであ

ろうから、このような殺し文句も自然に出てくるのであろう。

### 三

「跋法帖」の第二十一番目は、「余、嘗て近世三家の書を論じて云う、『王著は小僧の律に縛せらるるが如し。李建中は講僧の禪に参ずるが如し。楊凝式は散僧の入聖するが如し』と。当に右軍父子を以て標準と為すべし。予の此の言を觀れば、乃ち其の遠近を知らん。」とあり、山谷が三名家の書家を比較して評している。三名家とは王著、李建中、楊凝式である。王著は小僧が戒律に束縛されるが如く、李建中は講律僧が参禪するが如く、楊凝式は散僧が入聖するが如くと評した。これは二王を標準とした見方であり、二王との遠近が具体的に理解できるように評したと自己弁護をしている。確かに秀れた批評の仕方である。さすが禪の道に明るくわかりやすい論法である。しかも基準を二王に置いている所もさすがである。二王に対する日頃の山谷の考え方もこれでわかる。秀れた評者ということであろうか。

そして、「跋法帖」の最後である第二十二番目は、「大令の草法、殊に伯英の淳古に迫る。恨む可きこと少なくして、いよいよ成就せるを覚ゆ。所以に中間の書を論ずる者、右軍の草を以て能品に入れ、而して大令の草は神品に入る。余、嘗て右軍父

子の草書を以て之を文章に比す。右軍は左氏に似、大令は莊周に似たり。晋より以来、脱然として都て風塵の氣無く、二王に似たる者を得難し。惟だ顏魯公、楊少師のみ、大令に髣髴するのみ。魯公の書は今人俗に随い、多く之を尊尚す。少師の書は、口に善と称すれども腹は非なり。深く楊氏の書を曉らんと欲せば、当に九方臯が馬を相するが如くすべし。其の玄黄牝牡を遣れば乃ち之を得ん。」とあり、草書に関しては獻之が大分持ち上げられている。先ず草聖と言われた張芝の淳古の雰囲氣に大いに迫っているというのである。しかも完成の域に達している時まで山谷は誉めている。それが何より証拠には従来の書論に於いてランク付けがなされているというのである。即ち、唐の張懷瓘の「書議」では張芝第一、嵇康第二、子敬（獻之）第三、羲之第八である。従つて山谷の言うように草書に関しては獻之が神品で、羲之は能品となるのである。しかし、張懷瓘の「書断」では二王の草書は二人とも神品に入れられている。即ち、山谷は「書議」の品第を引用して述べたのである。そしてさらに獻之の書について触れ、晋時代よりこのかた風塵の氣なくして二王に似ているものはほとんどない。その中にある顔真卿と楊凝式が獻之に似ているというのである。二王の書に似ているものは得難いと「二王」を上げておきながら、顔と楊とが羲之ではなく獻之に似ているとはつきりと断言するということは

一体どういふことなのであろうか。山谷は「二王」と一口に言つた時には羲之が先頭にくるより前に獻之のほうが先行するのであろうか。それはどこに原因があるのであろうか、今後の課題として探つていかなければならない。敢えて羲之ではなくて、獻之であるとする山谷の心中は、また眼のつけ所はどこにあるのか考えなくてはならない問題である。獻之から顔楊への流れ、山谷と顔楊との関係、そして山谷と獻之との関係などが今後の課題となる。

次の「題絳本法帖」は二十項目からなり、二王に関するものはその内十二項目である。「絳本法帖」は「絳帖」のことで、宋の潘師旦が「淳化閣帖」の翻刻にさらに増して二十巻としたものである。「石刻鋪叙」巻上の「絳帖」冒頭に

前後各十卷、相傳駙馬潘正夫、以閣帖増損翻刊、間摹淳化被旨歲月於卷末。

とある。そして、「増損翻刊」に関しては次のように分類している。

- 1 閣帖本無、而全卷増入
- 2 閣帖本無、而卷内増入其人
- 3 閣帖本有、而卷内刪去其人
- 4 閣帖卷内所載、而増其帖
- 5 閣帖卷内所載、而刪其帖

## 6 閣帖同其人、而全換其帖

そして、二王に關しての『絳帖』の増損は、『淳化格閣』では二王の帖、即ち、六・七・八巻が羲之、九・十巻が獻之の計五巻にまとめてあるが、『絳帖』では、前・後帖どちらにもあつて十巻に増益されている。しかし、『淳化閣帖』の六・七・八・九・十巻の各巻の中から削除された帖もある。

さて、『題絳本法帖』の第一番目の跋に、「心能く腕を転じ、手能く筆を転ず。字を書するに便ち人意の如し。古人の書に工みなるは它異無し。但だ用筆を能くするのみ。元豊八年、夏五月戊申。趙正夫、此の書を平原の官舎に出だす。会觀せる者三人。江南の石庭簡、嘉興の柳子文、豫章の黃庭堅。」とある。心がはずめば体の動きもよくなり、体が動けば腕も快く動き、当然手もよく動いて筆運びも軽やかになる。「心能く腕を転じ」とは心の自然の流れにまかせ筆を運ぶということであり、心の動き、心のはずみ具合が何よりも大切であるということを山谷は先ず述べて、さらに古人が書に巧みであるということは、心がよく動き筆が自然にそれに應じて動き、用筆も自然の流れの理にかなつてよく書けるのである。「元豊八年（一〇八五年）夏五月戊申。」とあるが、この日に山谷を含めて三名が『絳帖』の書を鑑賞した。その時に山谷はきつと心の動きと用筆の關係を感じたのであろう。いかにも山谷らしい感覚であり、「心能轉腕、

手能轉筆」という言い方は、山谷が日頃考えている哲学でもある。

つづいて「題絳本法帖」の第二番目には、「高宗自<sup>(1)</sup>り以上、皆な鍾・王の典刑有り。其の妙処に当りては、殆んど之を王家の二令の書中に編ぜんと欲するも、略ぼ愧ずる無きなり。」とある。この高宗とは唐の高宗のことであり、「自高宗以上」とは、『絳帖』に於いて、後巻の第一は宋太宗のみ（これは『淳化』には不載部分）、第二は西晋の武帝、東晋の元帝、宋の明帝、齊の高帝、梁の武帝、唐の太宗、そして唐の高宗の順で掲載されている。その唐の高宗までの諸帝、即ち具体的には八帝の書は、ほとんど鍾繇と羲之の書の典型を保つてはいるが、その書の妙処は王家の二令、即ち獻之と王珣の二人の書の中に編入しても、ほぼ愧ずることがないというのである。これは一体何を根拠に山谷はこのようなことを言い切るのだろうか。これは明らかに羲之よりも獻之に対して熱い視線を当て、肩を持つていしか思えない。これは皇帝の書を取り上げて意識的に述べているのであるから、よほどの自信を持つて山谷は言っているのであろう。

「題絳本法帖」の第四番目には、「余、嘗て書を評す、『字中、筆有るは、禪家の句中、眼有るが如し』と。右軍の書の如きに至りては、涅槃經の伊字を説きて三眼を具するが如し。此の事、

要は須く人自ら体会し得べし。見て論を立て、便ち諍を興す可からず。」とある。山谷は嘗って書を評して、「字中に筆が生きているというのは、禪家の句の中に眼があるようなものだ。」と言った。羲之の書はその点完璧であって、丁度、仏法の極意を説いた涅槃經が「伊」の字を説いてあたかも三眼を有するが如くである。これは要するに自らが体得したものであって、見て論を立て議論すべきことではないと力説している。羲之の書のように自分で体得したものでなくてはならないということ。そのようなになれば字中に筆が生きるといふことになる」と説いているのである。

つづいて、第五番目には、「王会稽、初め書を衛夫人に学ぶ。中年遂に古今に妙絶す。今人、衛夫人の遺墨を見て、右軍当に北面すべからざるを疑う。蓋し『九万里なれば則ち風ここに下に在る』を知らざるのみ。」と山谷は述べているが、これは少々皮肉が意識的に入っているようにも思える。弟子の羲之の書が、師匠の衛夫人の書よりも上ということ述べるのに何も『莊子』の逍遙遊の語まで引用しなくてもよいであろう。それほど差をつけて何も羲之を持ち上げなくともと思うが、山谷にしては少々やりすぎである。羲之の書は立派で秀れていることは万人が認める所であるが、師匠より弟子が上位となることはむしろほほえましいことであり、自然の理であるから、たとえ弟子が

上であると思っても敢えてそれを取り上げて言い立てなくてもよいのではないだろうか。

衛夫人は羲之の一番初めの師匠であるが、中年になってからは羲之の書は絶妙の境地に至っていて、はるかに高い所にある。近ごろの人々は衛夫人の遺墨を見て、羲之は弟子としての礼をとるべきではなかったのではないかと疑われるくらい、その差が大きいというのであるが、羲之自身はそのようなことには無関係である。山谷は『莊子』の例をあげて、九万里の上空が羲之であり、下にある風が衛夫人という譬えにしているが、羲之を思い切り持ち上げている山谷の気持もよくわかる。

第六番目の「題絳本法帖」には、「右軍の筆法は孟子の性を言い、莊周の自然を談ずるが如し。従説横説、意の如くならざるは無し。復た常理を以て之を待つ可きに非ず。」とある。羲之の筆法は、例えば孟子が人間の本性を説いたり、莊子が終生仕えず人間は自然に帰れと孔子の思想に反発するように、自由自在で思うがままである。従って単なる通常の論理によって簡単に説かれるものではないのである。羲之の筆法も目先きは簡単そうに見えても仲々その本質は深く、孟子や莊子が生涯かけて各々の思想を確立したのと同じくらい、羲之の筆法にも背後には思想性、精神性などがあり、並々ならぬものを含んでいるという観点に立つべきである。

つづいて、第七番目には、「右軍の真、行、章草、藁、曲に其の妙処に当らざる無し。往時、書家、論を置きておもえらく、『右軍の真、行は皆な神品に入り、藁書は乃ち能品に入る』と。

知らず、何によつて便ち此の語を作すや。政に今日の士大夫が禪師を論じて、某優れ某劣るとするが如し。吾、ついに解せず。古人言う、『坐に孔子無ければ、焉んぞ顔回を別たんと。真に言を知る者なり。』とあるが、羲之の楷書、行書、章草、藁書(行草書)はよく妙処に當っている。「書議」の中では「羲之の楷、行は神品に入り、藁書は能品に入る」としているが、一体何を根拠としてこのようなことを言っているのであらうかと山谷は抗議をしている。山谷に言わせれば多分藁書も神品に入れるべきだと主張したのであらう。このような品第は丁度、今日の士大夫が禪師のことを論じて、誰は優れ、誰は劣ると言つて弁別しているのと同じで、このようなやり方はよくわからないと山谷は述べている。山谷は羲之の書を品第の対照にすること自体を嫌っているようである。目先きだけの判断に異論ありということであらう。目に見えないものを論ずることは難しく、また品第のランク付けをすること自体さらに問題がある。羲之の書を形式的にだけ見るということに山谷は異論をとなえているので、本題跋の言わんとしている所も理解できる。座に孔子が居なければ弟子の顔回を見分けることはできない。即ち孔子が

居るから顔回を見分けることができるのであると古人が述べているように、羲之の名蹟があるから他の多くの名蹟の存在はわかるのであらうと山谷は主張するのである。

第八番目には、「王氏の書法はおもえらく、『雖もて沙に画くが如く、印もて泥に印するが如し』と。蓋し鋒を筆中に蔵し、意は筆前に在るを言うのみ。承学の人、更に蘭亭の永字を用いて以て字中の眼目を開き、能く字家をして拘忌多く、一種の俗氣を成さ使む。之を要するに右軍の二言は群言の長なり。』とある。羲之の書法は例えれば「錐画沙」「印印泥」のようであり、これは藏鋒である。藏鋒にして「意は筆前に在り」にしなければならぬというのである。しかし、この教えを承けついで人たちが、さらに蘭亭序の中の「永」の字を用いて、字中の眼目を分解して永字八法などと言っているが、書を学ぶ人々を拘束することが多くなり、一種の俗氣を成しているのはよくないことである。しかし、この羲之の言う「錐画沙」と「印印泥」の説は、すべての書論の王者ともいうべきだと山谷は述べている。「錐画沙」は姜夔の「続書譜」に「錐画沙者、欲其勻而藏鋒」とあるように藏鋒の説明である。また「印印泥」は「印を封泥に押す」意であり、山谷はこれを「意先筆後」と解している。用筆は「藏鋒」が重要であり、書作する時の心構えは「意先筆後」が大切である。そしてこの両者は羲之の書にあらわれていると



山谷は説くのである。

第九番目には、「王令の翰墨、ついに俗気無し。平原の塵土の中に、夜この書を開くに、深きに臨み高きに登り、轡絡を脱棄せる魚鳥の如し。皆な人意の妙処を得たり。」とある。王令、即ち獻之の書には全く俗気がない。山東省の平原の塵土の中で、夜この獻之の書を開いて見ているが、まさに魚がさらに深い淵にいくことをのぞんで、きずなを脱却し、鳥がさらに高い山に登ろうとして束縛を脱け出そうとするような勢いがある。真に人意の好処を得た書であると得意の脱俗論で山谷は獻之を頭から誉め称えている。蘭亭序の中の「永」の字を用いて字中の眼目を分解して「永字八法」などといっているが、書を学ぶ人々を拘束することはさらに俗気をもたらせてよくないと言っている。そして山谷のこの脱俗論は二王をはじめすべての書家に対しても一つの物差しとして存在しているようである。

「題絳本法帖」の第十番目には、「謝太傳嘗て獻之に問う、『卿が書、君が家尊に何如ん』と。獻之曰く、『固よりまさに同じからざるべし』と。『論者多く然りと為さず』と。彼、乃翁と抗行せんと欲し、大いに不遜なるに似たり。余、嘗て其の書を評す、『右軍は能父たり。中令は能子たり。同時の諸人、皆な此の位に在ること能わず』と。』とある。これは羲之の親友の謝安と獻之との問答であり、他の書論にも多く引用されている。しかし、

ここで従来のと違う所は、獻之が「彼欲與乃翁抗行、大似不遜。」と言っている所である。一例を上げれば『世説』品藻第九5には

謝公、王子敬に問う、「君が書は君の家尊に何如」と。答えて曰く、「固より当に同じからざるべし」と。公曰く、「外人（世間の人々）の論は殊に爾らず」と。王曰く、「外人那ぞ知るを得ん」と。

とある。獻之は「固より当に同じからざるべし」とはじめにはつきりと答えている。それに対して「外人の論は殊に爾らず」、即ち世間の人の評はそうではないということは、羲之と同じということよりも、羲之よりも下というように世評では見られているということを謝安は暗に含んでいるのである。それに對して少々立腹ぎみの獻之は「外人那ぞ知るを得ん」と、即ち「世間の人たちにどうしてわかりましょうか。」という所で『世説』は終っている。獻之が「どうしてわかりましょうか」と言っている内容は、父と同じだということが世間の人にはわかるわけがないということをお腹に含んだことであろう。

しかし、本題跋での山谷の扱いは少し違っている。立腹ぎみの獻之ではなくごく冷静にとらえて、「彼欲與乃翁抗行、大似不遜」と。即ち、「獻之は父羲之と同等でありたいと願っていたわけ、非常に不遜に見える。」とある。父と同等でありたいと願っ

ていたという所に山谷の解釈があり、また、そのこと自体については山谷は不遜に見えると述べている。ということは、山谷は羲之よりも獻之の方が上であると心に密かに思っているのので「不遜」に見えたのであろう。山谷は『世説』の内容を一步進めて論じている。

そして、さらに父子の書を山谷は評して、「右軍は能父であり、中令は能子である。当時の人々は誰も二人に及びえないのである。」と結んでいる。能父は優秀な父であり、能子は優秀な子である。確かに二王はそれぞれ秀れていたのであるが、獻之は羲之の書法に工夫を加えて新しく創り出し、父とともに名声を得ていたのである。山谷自身もこれを取り上げ、獻之は羲之に及ばないという従来の評価に対して不満であり、その為に獻之の持ち味をさらに称賛しているのである。

第十一番目には、「王中令、人物高明、風流弘暢。謝安石に減ぜず。筆札の佳処は濃纖剛柔、皆な人意と会す。正に書評を觀るに、大いに公ならざるに似たり。逸少を去ること、応にかくの如く遠かるべからざるなり。」とあり、山谷の獻之に対する思いやりがうかがえる。しかし、山谷の独断的な評とも言えるかもしれないが、とにかく人物においても羲之に決しておとるところなく、書においても濃纖剛柔などすべて人意になつてゐるところが古書における獻之の評価は別人のことを評しているよ

うであるが、決してそのようなことはないと言ひ山谷は説いている。古書とは、例えば宋の羊欣(三七〇〜四四二)の『古來能書人名』には

王羲之、晉右將軍會稽內史。博精群法、特善草隸。羊欣云、古今莫二。

王獻之、晉中書令。善隸篆。骨勢不及父、而媚趣過之。とあり、梁の武帝の『觀鍾繇書法十二意』に

又子敬之不迫逸少、猶逸少之不迫元常。

とあり、具体的には山谷はこれらに不満を持ち反発していたのである。獻之は二王と言われるときはいつも父の影にかくされ、思うように羽がのばせず、才能は父以上のものを持ちながらほとんど古書論の上では論じられなかった。『古來能書人名』の「骨勢不及父、而媚趣過之」、即ち骨勢は父には及ばなかったが、媚趣は父より以上であつたというぐらいである。山谷は獻之の才能を認め何とか父以上のものを世間の人々に知らしめようと日頃から考えていたのであろう。とにかく獻之の稱賛の跋がつづいている。

次に、第十四番目には、「宋齊の間、士大夫の翰墨頗る工みなり。合処便ち右軍父子に逼る。蓋し其の流風遺俗、未だ遠からず、師友淵源、今日の俗學と同じからざるのみ。」とあるが、やはり二王の書はすべての物差しになつていたのである。宋齊時

代の士大夫たちの書くものは巧みであり二王に迫るほどである。それは風俗習慣が二王と遠くないからであり、師友の根源が今日のように俗学でないからである。また、晋代の士大夫たちはおおむね書を能くし、筆法はみな成就している。二王はその中の秀れたものを抜き出したものにすぎないとも山谷は前でも述べている。

「題絳本法帖」の最後の第二十番目には、「(前略)魯公の乞米、乞鹿脯帖、与郭令書、祭姪文を觀るに、皆な当に王中令と雁行すべきのみ。(後略)」とある。これは獻之と顔真卿を比較している。しかも顔は獻之と雁行しているというのである。具體的にどのような点について述べているのかは不明である。両者のどのような点を比較して雁行しているのか、例えば獻之が書いた尺牘「中秋帖」などについてのことなのか、あるいは「洛神賦十三行」などを含んだ全体的なものを対象としているのかが不明であるが、とにかく雁行していると山谷は言うのであるが、それが一体何によるものかは今後の課題となろう。

唐時代の文化は一見華やかではあったが、規律正しくて画一的な面があった。しかし、唐の中頃に起った安史の乱を境として新しい文化の発展が芽生え、さらに革新的なものとして理論的に整理され、そしてそれらに深さが加味された。情趣的で新

生な自然觀を背景とし、人間の本性を明らかにする北宋哲学を基盤とした北宋時代の文化が生まれた。このような新しい時代を背景にして、書においては、北宋の四大家の出現は偉大なものであり、その中であって黄山谷の存在も目ざましいものであった。彼は活気に満ちた精神を、書作三昧、詩作三昧、そして書画題跋三昧にぶつけていたのである。特に書の面では画一的な初唐の書風から脱皮しようとした中唐の顔真卿や懷素に目を付け、羲之一辺倒の企画的で形式的な見方に山谷は反発した。彼の「山谷題跋」にはその一端が次々と披歴され、脱俗、自然、人間性、精神性などがその主たるモチーフである。

本稿は「山谷題跋」巻四の中から二王に関係のある篇について考察を試みた。取り上げた各篇の中で二王がどのような形で扱われ、どのように評価され、そしてどのような影響を与えているかについての調査とそれに対する考察である。全体三十四篇の内、二王に関係があるのは十九篇であり、本稿はその内の十篇について触れ、上巻としてまとめた。後半の九篇は次回に下巻として掲載する予定である。今回は、蘭亭序からはじまり、主な篇は『淳化閣帖』『絳本法帖』までであるが、『淳化』については二十二篇の内十一篇を、また『絳本』については二十篇の内十二篇を考察の対象とした。従って上巻は合計三十一篇について触れたことになる。山谷は多分に二王を意識して書活動

を進めている。伝統を継承することに重点を置きつつも次の新しいスピリットを吹き込むことに意欲が感じられる。二王とは羲之、獻之の父子であり、世評とは逆に思いきって獻之に肩入れしている。そしてその行為の中から変わった流れを期待している。山谷の強い精神の息吹が各題跋から伝わってきて、次に何を為すべきかを示唆してくれる底の深いものが魅力となっている。人間臭いが故に興味深い書論である。

なお、最後になりましたが、本原稿をまとめるに当り、次の著者の方々の書籍を参考にし、多数引用させて頂きました。ここに記して慎しんで感謝の気持を表したいと思います。

【中國書論大系】(第四卷) 山谷題跋卷四

足立 豊譯 二 玄 社

【中國書論大系】(第一卷) 古來能書人名・論書

吉田教專・神谷順治譯 二 玄 社

【中國書論大系】(第一卷) 觀鍾繇書法十二意

中田勇次郎譯 二 玄 社

【中國書論大系】(第二卷) 書議

吉田教專・神谷順治譯 二 玄 社

【中國書論大系】(第三卷) 書斷

吉田教專・神谷順治譯 二 玄 社

【宋人題跋】上・下

楊家駱主編・藝術叢編 世界書局印行

【淳化閣帖】(第二卷) 法帖大系2

佐々木猛・松尾良樹 二 玄 社

【淳化閣帖】(初拓肅府本)

藤原楚水校注 清 雅 堂

【淳化閣帖釋文】

藤原楚水校注 清 雅 堂

【中國書論集】

中田勇次郎著 二 玄 社

【王羲之全書翰】

森野繁夫・佐藤利行著 白 帝 社 刊

【晉書】(和刻本正史)

森野繁夫・佐藤利行著 中 華 書 局

【世說新語】(上・中・下) 目加田誠著

森野繁夫・佐藤利行著 汲 古 書 院

【世說新語】(上・下) 竹田晃訳

森野繁夫・佐藤利行著 明 治 書 院

【黃庭堅】

中田勇次郎著 学 習 研 究 社

注

(1) 廉頗(れんぱ) 戦国時代、趙の人

(2) 藺相如(れんさ) 戦国時代、趙の人

二人は国益を第一とし、私怨にこだわらずに武功をあげ二人

で協力して趙のために尽くした。(『史記』廉頗・藺相如列伝)

(3) 結繩 『易』繫辭上伝下「上古結繩治。後世易レ之以三書契二

とある。

(4) 沈著痛快 おちついて非常に快いこと

「吳皇象、善行草書。世称沈著痛快。」（法書苑）

(5) 欧陽脩は……建中三年のものである」

この「」内は董道の『広川書跋』の引用。

(6) 吳通微兄弟 吳通微・吳通玄兄弟のこと。

(7) 亞於右軍 羲之に次ぐ意

(右軍の草書と比しても愔の線は細くて弱い)

(8) 道民 道教を信奉している民の意

(9) 鵲冠子

書名であり、三卷十九篇から成り、撰者未詳。或は楚の隱士の著という。その真偽は未詳。なお「鵲」はやまどりで雉に似た野鳥。

(10) 故應不同 固當不同（『世説』品藻第九五）

「もとより、まさに、同じからざるべし」と訓む。両者とも同訓・同意である。

(11) 高宗自り以上（自高宗以上）

『絳帖』後帖

（『絳帖』所収単帖総目表より）

大宋帝王書第一

太宗皇帝書

寄張帖詩

〃

登黃鶴樓詩

〃

漢宮懷旧詩

〃

宮城詩

歷代帝王書第二

『山谷題跋』卷四に於ける二王の存在に関する考察（上）（塚本）

西晉武皇帝書 省啓帖

東晉元帝書 安軍帖

〃 中秋帖

宋明帝書 鄭修容帖

齊高帝書 破爛帖

梁武帝書 數朝帖

唐太宗皇帝書 氣発帖

〃 唱箭帖

〃 患痢帖

〃 比者帖

〃 江叔帖

〃 兩度帖

〃 温泉銘

唐高宗皇帝書 昨日帖

〃 無事帖

〃 錢事帖

（以上の八帝が「高宗自り以上」の意）

（本学助教教授）